あわせて、『皇太神宮儀式帳』や『止由気宮儀式帳』（『群書類従』第一輯）にも、それぞれの職掌の中で、内人（神宮に所属してもろもろの雑事を担当する人）や物忌（御神体近くに忌み籠りして神霊に奉仕する童女もしくは童男）として「礒部（石部）」姓のものが多数見える。

『皇大神宮儀式帳』の奥付によると、延暦二三〈八〇四〉年八月二八日に撰上されており、編者筆頭に「大内人無位宇治土公礒部小継」と記されている。ということは、伊勢神宮に隣接する猿田彦神社宮司家の宇治土公氏もまた、礒部の出であることがわかる。

考証めいた話が長びいたが、礒部氏は海辺を拠点として活躍する民であることがおさえられた。実際今でも、全国の礒部の地名や神社はほとんど、海辺や海にほど近い河川沿いに分布する。

こうしたことから、丹波国の氷上という、中央分水界があるような内陸部に礒部氏の拠点があるということは、極めて例外的な現象といえる。おそらく、ここは礒部の民がもとから拠点としていたのではなかったのだろう。現在の岳部神社社地には、もとは水分神的性格の神がまつられ、地元民から篤く信仰されていたはずである。氷上が重視されるようになってから、中央政権からの派遣か、あるいは礒部氏による自主的な戦略として、この地をおさえるべく、土着の神を廃棄したと見るべきである。

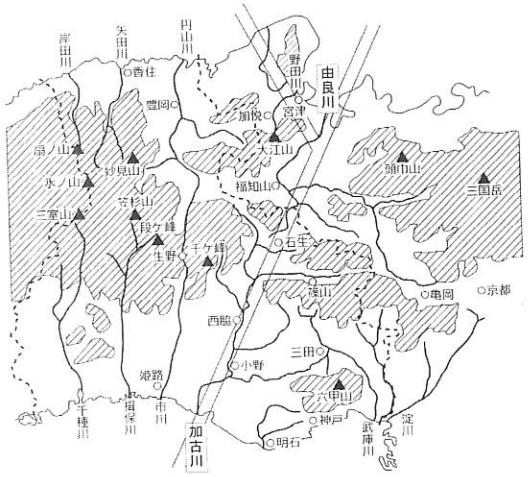
そもそも、分水界のある「石生」とは在来の地名であったかどうか。平城宮出土の和銅三〈七一〇〉年木簡に「石負里」とあったから、「いそふ」地名はそのころには成立していたが、同時期の和銅四〈七一一〉年に、続日本紀が記すように、礒部が度会姓を下賜されるわけだから、八世紀初頭までにはすでに、礒部氏は朝廷内での確かな地位を築いていたと言える。

「石負（石生）」地名は、その地が礒部氏に管掌されるようになってから改変された地名かもしれない。

武士を表す「もののふ」の語源として、軍事氏族物部の異訓「物部」という指摘があり、また平成天皇の即位の折に万歳をしていた首相が海部ではなく「海部」であったように、礒部もまた「礒部」と訓むこともあったろう。

つまり「石負（石生）」とは礒部氏によって、根拠地の礒部地名と同様に付会されたのではないか。海岸沿いではないから「礒」の字を避けたにすぎないのではないか。

くだくだしくなってしまったが、何が言いたいかという、氷上は、外部の者たちにとってこそ、重要な地であった、ということである。特にその重要性に気付き、活用できるのは、舟行能力の高い人々によって、ということでもある。



氷上回廊図
（播磨～若狭湾平地帯ルート）

開田齊著『雑学丹波「氷上回廊」』（青垣町）より

日本海—瀬戸内海交流の大動脈「氷上回廊」

氷上はたんに谷中分水界というだけでなく、日本海側の一級河川由良川と、瀬戸内海側の一級河川加古川の上流部どうしが、可航河川の支流をもって接近し、かつ陸路においても、標高九五メートルの中央分水界であるから日本一険しくない峠越えで互いにアクセスできる。つまり脊梁山脈のつらい山越え抜きで、日本海と瀬戸内海とが互いに通り抜けできるのである。「氷上回廊」と呼ばれている。

もしも地球温暖化が進んで海面が百メートルほど上がれば、加古川と由良川はもちろん、標高九十五メートルの氷上も海没し、ここに本州を東西に分断する「氷上海峡」が出現することになると想像すればわかりよい。

由良川—加古川を結ぶ一本道としての氷上回廊には、現在は旧道を利用して国道一七五号線が走り、JR加古川線・福知山線もそれに沿い、このラインの東側、篠山盆地を中心とした低山地帯を縫って舞鶴自動車道も建設されてあるが、これにしても石生のすぐ東側の春日町にインターチェンジを設けて国道線と互いにアクセスできるようにしてある。むかしもいまも、氷上はまさに日本海と瀬戸内海をつなぐ交通の要衝なのである。

しかも、由良川水系と加古川水系の末端部分が接近して果てたこの地には、物資を陸送する道路だけではなく、ちょうどその道路に併設するかのような盆地までが東側（春日町、市島町）にも西側（氷上町）にもあって、南北の文物を取引する市場が展開されやすいようになっているのである。「市島町」はもちろんのこと、春日町の「七日市」、氷上町「市辺」地名にその名残をとどめる。

市辺遺跡の調査報告によると、加古川本流に沿うように設営された掘立柱建物群は、「規模は小さく、配置にも画一性が乏しいため、官衙（役所―筆者注）の根幹の施設でもまた正倉（役所の倉庫―筆者注）にもなり得ない」（種定淳介「兵庫県氷上町市辺遺跡の発掘調査」『条里制・古代都市研究』十六号　二〇〇〇年）と評される。つまり磯部のような舟行民を雇った民間企業が、多数進出した貿易港湾都市のようなものであったかもしれない。

そう考えると興味深いのは、『播磨国風土記』託賀郡都太岐の項の記事である。讃岐日子の神が、氷上刀賣に求婚して断られ、それでも諦めきれずに求婚し続けたところ、怒った氷上刀賣が播磨の神建石命を雇って讃岐日子と戦い、撃退した、という話。

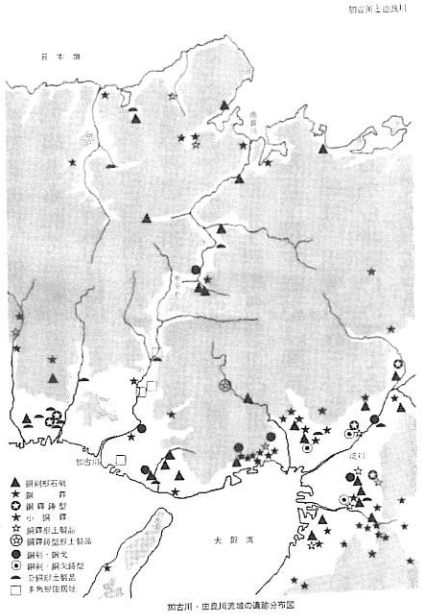
こう読めるだろうか。

氷上刀賣は、崇神紀の氷香戸邊と同じく、丹波国氷上郡の首長的な女性像なのであろう。讃岐日子（香川県）に代表される四国の勢力が、氷上回廊への進出を企てた。氷上に拠点をつくって直接日本海勢力との交易をしたかったはずだ。でなければ瀬戸内海ばかりが彼らの商圏であり、さらに北側の文物を獲得するには、加古川をおさえる播磨からかけられる関税に、苦しめられたことだろう。考えてみればありがちな話なのである。

この話は播磨の立場で書かれたものだから、自分たちの利益を優先する話とはせず、困っている氷上刀賣を救済する筋立てとした。何のことはない、加古川河口播磨灘をおさえる限り、自分たちが甘い汁をすすれるのだから、その既得権は手放したくないに決まっている。

このように氷上は、中国四国、近畿北陸のすべてから熱いまなざしを注がれた美姫であったわけだ。

石生の北東、春日町七日市には弥生時代の拠点集落遺跡の存在も確認されている（種定淳介「加古川と由良川―モノの移動について―」『横山浩一先生退官記念論文集Ⅰ生産と流通の考古学』一九八九）。ということから、磯部氏がいつ頃から氷上を管掌するようになったかはわからないが、少なくとも氷上回廊を利用した南北交易自体は、弥生時代へとさかのぼれることは確かなのである。



種定論文図（『横山浩一先生退官記念論文集Ⅰ』）より

種定淳介の報告によると（前掲「加古川と由良川」）、たとえば鳥取県と、兵庫県の神戸から、同范（同じ鋳型で作られた）銅鐸が出土したことや、石剣や銅鐸がこの氷上回廊沿いに分布し、そればかりか、日本海沿岸部、瀬戸内海沿岸部や大阪湾、淀川、大和川沿いといった、明らかに南北の水上交通路沿いに分布が偏っており、内陸部にランダムに分布していないことから、氷上回廊が太古における流通の大動脈の役割を果たしていたことが示されている。

また時期ごとの特徴もあり、弥生前期は南北交流の痕跡はあまり見られないとのこと。

中期になって、あきらかに、南側勢力の播磨系土器の影響力が北側へも浸透し、石生以北の由良川沿いに多く分布するらしい。弥生中期は南が強かった。

ところが弥生後期に入るとこの傾向が逆転し、日本海側山陰地方や北陸地方系の土器分布が優勢となり、石生以南の加古川流域にまで分布をみるという。後期は北の文化に南側が浸食されてきたわけである。

卑弥呼は出雲出身だった!?

これはちょうど、四隅突出型墳丘墓という、大和建国以前の中国地方に特徴的であった墓制の推移とも、大まかには符合する。

すなわち、四隅突出型墳丘墓は弥生中期後半に、備後国（広島県）は中国山地で出現し、出雲方面へ影響を与えた（『週刊朝日百科日本の歴史　原始・古代⑧倭国誕生と大王の時代』）。弥生中期の南から北へのベクトルである。

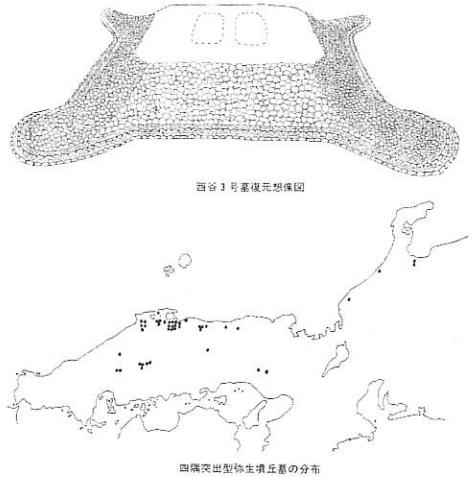
やがてこの墓制は、弥生後期の二世紀ごろから、出雲

（島根県）、伯耆（鳥取県西部）、因幡（鳥取県東部）地方を中心に分布し始め、大型化してゆく（渡辺貞幸「『出雲連合』の成立と再編」『出雲世界と古代の山陰　古代王権と交流7』一九九五年　名著出版）。有名な、出雲の西谷三号墓等の巨大墳丘墓がつくられたのもこの時期で、ちょうど『魏志倭人伝』の「倭国大乱」の時期に当たる（『新版日本史年表』岩波書店）。

この出雲の西谷三号墓からは、吉備地方や丹後、北陸地方の土器片が多数出土していることから、この墓の上の広場での祭祀には、他の地域の特派員も参加し、奉仕したことが考えられている（瀧音能之「検証！　謎の出雲王国」『歴史と旅　特集古代出雲と謎の日本海王国』一九九八年二月号）。逆に、出雲の土器を他地域で発見した情報はないということから、こうした地域連合は出雲を盟主としたものであったと考える研究者もいる（中村五郎「伽耶と北日本の間―土器編年から見た出雲の王墓の出現その他―」『日本考古学第一一号』二〇〇一年）。

さらに中村五郎は、出雲西谷三号墓の被葬者一族の権威は、中国地方から北陸にかけての広範囲に及ぶこと、鉄の流通に関しても権威を保っていただろうこと、吉備系土器が、大和の古墳で出土していることから、中央集権を大和の地へ遷したのちにも吉備からの供献が続いたと解釈できること、などから、西谷三号墓の家系から、卑弥呼が出たと、思い切った結論を出している（中村前掲論文）。この被葬者の貧しい副葬品からして、必ずしも世俗的な富裕者ではなく、宗教的な権威者であることも、根拠にしている点が興味深い。

私には検証するすべもないが、必ずしも奇説とは思えない。邪馬台国論争で、出雲が蚊帳の外に放置されてはいないまでも、かろうじて衛星国的な地位を与えられているにすぎないことの方が、むしろ不思議だった。出雲



渡辺貞幸著「『出雲連合』の成立と再編」より

イコール邪馬台国そのものではないにしても、中村のような観点での関係性は、もっと吟味されてもよいのではないだろうか。

氷上を制する者は海を制する

同様の墳丘墓は、日本海沿い北陸地方に若干見られる程度で、ほかの地域では皆無に近いが、加古川下流域に二例、かろうじて見られる。加西市網引町周遍寺山一号墳丘墓と、小野市船木町船木南山墳丘墓である。ちょうど加古川を挟んで東西に並んでいる。

やはり、氷上回廊内なのである。

これを、単なる例外事例として軽く扱ってよいことではなさそうだ。あきらかに氷上を媒介とした、日本海勢力の瀬戸内海、大和方面への進出の痕跡であるからだ。これを三世紀以降とすれば、その後半期から四世紀初頭にかけて、畿内から瀬戸内海沿岸に古墳が出現し始める時期に、墳丘墓文化と古墳文化との間に何らかの折衝が起きたことは想像に難くない。

崇神朝に象徴される初期大和政権と、出雲勢力圏との折衝、それは崇神紀六十年条の出雲神宝事件の流れにもおおむね符合する。氷上回廊を制することは、戦略的にも経済的にも意義深いものであったろう。

磯部氏が大和政権の尖兵として氷上をおさえたのか、それとも漁夫の利を得るために先回りして、大和・出雲の両者と取引をしたのか、はたまた泥沼化する両勢力の間を取り持ち交易市場を経営することにしたのか、本当のところはわからない。

磯部は伊勢神宮外宮の司祭として大和政権内で重要ポストを得るのでそちら寄りには違いないが、もともと海人族として日本海側の海部とも交流はあったろう。

『神道大辞典』の言うような、西の海部、東の磯部、といった海人の二大勢力図的な説明は、ある程度その傾向は認められるが、必ずしもそうきれいに分かれるわけではないことも注意しておきたい。

大和岩雄の指摘によると、伊勢神宮の鎮座次第を物語った『倭姫命世記』で、倭姫が丹波の吉佐宮から出発したとあるが、それは丹後半島与謝郡（現京都府宮津市）籠神社のことで、神主は海部氏である。元伊勢と呼ばれるゆえんであるが、こうした伝承を強調している『倭姫命世記』の著者は度会行忠、すなわち磯部氏である（「古代の海部と天照大神の生成―皇大神宮の創祀」『日本の神々　神社と聖地6』白水社）。

ということは、磯部氏は日本海勢力側とも親しく交流していると考えられ、氷上が出雲の祭祀を復活させると

いう文脈が崇神紀の中で与えられるのも、故なしとしないように思われてくる。

いずれにせよ、大和・出雲のいずれかが滅びるという事態にはならなかった。

大和―出雲抗争を仲介した者がいて、それが磯部、もしくは磯部の前身の海人族であったと考えられるのである。

しかしなぜ磯部のような海人集団を頼らねばならなかったのだろうか。一国を支配するのでもなく、広域に分布するとはいえ、海岸線を拠点とする漁撈民に、それほど強い軍事力があったとは考えられない。しかし彼らを隷属させきることができる政権もまた、なかった。もしも大和朝廷に隷属していたのなら、氷上を管掌する神社は「岾部」神社ではなかったろう。つまり国津神の奇日方命ではなかったろう。天津神系をはじめから祀っていたはずである。

答えは、磯部は軍事集団ではなく、漁撈舟行術を駆使する職能団だからである。氷上回廊の水上交通を生かすには、相当ハイレベルな舟行術を要するのである。

私も調べてゆくうちにわかったことで、最初は安全で快適な航路と陸路だとばかり思い込んでいた。ところがそうではなかった。

実は、石生を中心として福知山から氷上本郷を結ぶ大運河を開削する計画が、記録に残っているだけで近世以降三回はあったようだ（石生水分れ資料館展示物。ウィキペディア「加古川」の項）。陸送抜きで、由良川と加古川を直接結ぶ可航水路である。由良川も加古川も、大規模な河岸段丘がないといわれる（開田齊『雑学丹波「氷上回廊」』一九九七年　青垣町）ほど、ゆるやかな流れの河川であるから、そうやって日本海と瀬戸内海が本当に乗り継ぎなしの一本でつながれば、経済効果もばく大なものとなろう。実際、そうして北前船の日本海航路を劇的に短縮し、上方（大阪、京都）への最短ルートを確保する狙いがあったらしい。

しかし、ついに実現しなかった。投下した資本よりはるかに高い収益が見込まれたであろうに、それなのに実現しなかった。

加古川に難所があったのである。

黒田庄町から南に下ったころから、地盤の影響か流路が突然狭くなり、支流も合流し、早瀬が多くなる。ことに滝野町の「闘竜灘」が圧巻である。もはや川とは言えない、海辺の荒磯のごとしである。

現在の状況は、近世期慶長年間（一五九六―一六一五）から開削されてきたものというから、それ以前の状

態は想像を絶する。これでは「氷上運河」が通ったとしても、千石積みの北前船はおろか、十石積みの高瀬舟も通航は厳しかろう。

実際、闘竜灘「開削」後も、百石超級の大型高瀬舟は闘竜灘下流、上流を十五石積み高瀬舟が舟運をになうというふうに、分担されていたようである。

もはや説くまでもないことと思われるが、古代においてこの舟運をになうには、相当熟達したプロを雇うか、陸送も組み合わせなければ、あまりにもリスクが高すぎた。荒磯のことは磯部、陸送のことは山部たち、などに頼るしかなかったのである。

こうして、氷上を中心とする大回廊は、それぞれの時代の中央政権の支配下に組み込まれながらも、物流の大動脈として健全に機能するためには、川の民、山の民、海の民といった、官吏たちの統制の手の及ばない、制外者たちの生き生きとした活動に負うことになった。

氷上を制する彼らこそが、実は日本海と瀬戸内海という、本州島を潤す海を制していたと言ってよかろう。

混沌こそがいのちの輝き

氷上は、博物学者南方熊楠ふうにいえば、さまざまな事象の集中交叉する萃点であった。平地の中央分水界という不可思議な磁場であり、その地の霊水に育まれた穀物を奉ずる神聖な斎国であり、二つの海域を結ぶ交通の要衝、異文化・異信仰をもつ人々やモノの交わる市場、遊動する民たちの集散する心臓部であった。

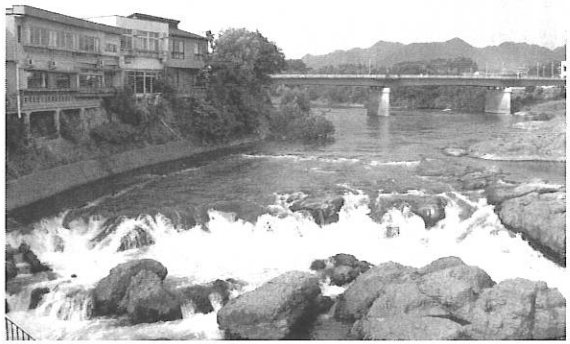
こう書いてきて、はたと思う。

氷上の先住民たちにとっての氷上とは何だったのか。何が彼らの歴史なのか。見方によっては、外部の分限者・権力者たちに利用される歴史であり、支配される歴史であり、あるいは逆に利用し、恩恵をこうむる歴史でもあったろう。さまざまな思惑や欲望のるつぼに巻き込まれる生活世界とも言えよう。しかしそれだから必ずしも不幸であったとは言えまい。

いつ頃まで行なわれていたかはわからないが、石生には一つの奇祭があった。

『式内社調査報告』所引の『岾部神社伝記』にあるという、「萬度参」である。

「氏子一同老少と婦女を不問正午過より午後三時まで裸体となり洗足にて各一本づつ竹串を持ち（男子に限る）鳥居前より走りつつ社前に参り之を献ず」るもので、この竹串が一万に達するまでくり返すらしい。各地にある暗闇祭のたぐいとも違う、白昼堂々、老若男女全員が素っ裸で神域に集合し、男たちは走るというので



「闘竜灘」
神戸観光壁紙写真集
http://kobe-mari.maxs.jp/

ある。

現在の萬度参は、さすがに裸にはならないらしいが、文章からして近代以降までは続いていたようである。昼間とはえ、性的な事故も起きやすかったのではあるまいか。しかしそれもまた神意であり、むき出しの生命体と祭の時間空間との萃（コンステレーション）点だったのに違いない。日常の秩序は崩壊し、犯し犯されといった対立を超え、混沌の輝きを皆で輝く、その状況こそが、神の顕現（けんげん）だったのだろう。

支配されるとか利用されるとか占拠されるとかいう状況があっても、必ずしもそれを否（ひ）とせず、さまざまな立場、役割を持った人々がダイナミックに交わることに、その地の神性発動を感得してきた。そうした心意伝承を大事に受け継いできた。

生きる支えとなる宝とは、本来そうしたところに見出すべきなのかもしれない。

國文學　平成20年12月臨時増刊号　11月25日発売　定価1785円

特集：俳句

対談　寂聴、新作句披露
―おもい出せぬ夢もどかしく蕗の薹　瀬戸内寂聴
『寂聴伝』著者　齋藤　愼爾

俳句ふたり論

○岡本一平と坪内稔典　坪内　稔典
○村越化石と阪口涯子　水野真由美
○橋閒石と加藤郁乎　仁平　勝
○久保田万太郎と増田龍雨　小澤　實
○金子兜太と正岡子規　復本　一郎
○三橋敏雄と高橋睦郎　橋本　真理
○桂信子と鈴木六林男　久保　純夫
○飯田龍太と廣瀬直人　廣瀬　直人
○藤田湘子と福田甲子雄　宗田　安正
○森澄雄と飴山實　宮坂　静生
○佐藤鬼房と津沢マサ子　高野ムツオ

○岡本眸と有馬朗人　対馬　康子
○鷹羽狩行と上田五千石　有馬　朗人
○宗田安正と齋藤愼爾　高澤　晶子
○河原枇杷男と堀井春一郎　齋藤　愼爾
○津田清子と稲畑汀子　堀本　吟
○宮坂静生と手塚美佐　恩田侑布子
○宇多喜代子と黒田杏子　中岡　毅雄
○鍵和田柚子と正木ゆう子　田中　亜美
○片山由美子と小澤實　奥坂　まや
○安井浩司と夏石番矢　鎌倉　佐弓

まっとうな俳句についての六章

○季語の不思議　私はどこへ消えたか　坂本　宮尾
○不幸と俳句　山崎ナオコーラ
○平成俳壇の行方　江里　昭彦
○寺山修司を遠望す　筑紫　磐井
○母はかなしも　母は遠しも　冨士眞奈美
○日本のソローと呼ばれた野澤一　齊藤　昇

にぎやかに
行こう

學燈社　03-5228-7154